

# 住民参加におけるワークショップの手法について ～現場ではどのような工夫をしていますか?～

調査課研究員 尾身 裕太郎（武蔵野市派遣）

## 1. はじめに

計画などを策定する際に行う住民参加の手法として、何が思い浮かびますか。代表的な手法としては、パブリックコメントやオープンハウス<sup>1</sup>、ワークショップなどが挙げられます。各自治体において、それぞれの手法を組み合わせながら活用しているかと思います。

本稿で取り上げるワークショップの特徴としては、参加者である住民同士が対話をしながら、グループで一定の意思決定をした意見を聴取できることや、その過程において参加者同士のつながり（ソーシャルキャピタル）をつくることのできる可能性<sup>2</sup>があります。一方で、参加者に対する自治体の課題などの情報提供の方法や意見の出しやすい雰囲気づくりなどの準備<sup>3</sup>をした上で実施しないと、形式的なワークショップとなってしまいます。

本稿では、ワークショップがグループ単位での活動となることに着目し、ワークショップの特徴とその生かし方を自治体の事例を通して紹介します。

## 2. 取組事例

### (1) 子どもたちのアイデア等を活かした公園づくりワークショップ（品川区）

1 パネルの展示やリーフレット等資料の配布により、事業や進め方に関する情報を提供する場を設ける手法

2 城山英明は「合意形成によって、単に意思決定できたということだけでなく、そのプロセスを経ることによってソーシャルキャピタルといった副産物ができるということもある」と述べている。「合意形成と支援手法」、自治実務セミナー、2019.3、P.6

3 城山英明は「参加型プロセスの中でいろいろとインプットがあれば、選択肢が拡大し、アウトプットの質自体が変わるということもあります」と述べている。「合意形成と支援手法」、自治実務セミナー、2019.3、P.6

### ①取組の背景と目的

品川区では、「区民と区の協働で、『わたしたちのまち』品川区をつくる」という基本構想の理念に基づき、2008年度に子どもたち自身が様々な議論と検討をし、新たな区立公園の計画案づくりを行いました。これ以降の公園の新設・改修の際には、子どもたちのアイデアを参考にして整備を進めてきました。しかし、当初の計画案づくりから10年が経過し、都市公園においても、ユニバーサルデザインの視点が求められるようになり、障害の有無に関わらず、あらゆる子どもたちが一緒に遊べるインクルーシブ公園のニーズが高まっていました。

子どもたちが主体となって、公園を計画するというコンセプトを引き継ぎつつ、障害のある子どもなども楽しめるユニバーサルデザインの視点を加えたワークショップを実施し、あらゆる子どもたちが一緒に遊べるインクルーシブ公園を目指して、計画案を作成しました。

### ②ワークショップの内容

ワークショップの対象者は区内の小学3・4年生で、2019年10月から2020年7月までに全6回実施しました。定員25名のところ、65名もの応募があり、定員を30名に増やした上で参加者を抽選しました。また、障害のある子どもたち2名を加えた合計32名を参加者としました。

第1回ワークショップでは、面識のない子どもたちが初めて出会う大切な場となることから、子どもたちが親しくなることに主眼を置きました。構成は、自己紹介とともに自分の好きな遊びを発表し、それらの遊びのどのようところが面白いのかを考えて、仲間探し（グループ化）を行い「遊びマップ」を作成しました。

第2回ワークショップでは、ユニバーサルデザインへの理解や必要性を学ぶ回としました。構成は、障害福祉団体の意見を○×クイズにして、子どもたち同士で議論しました。その他に、特別支援学校の教育コーディネーターを招き、通学する子どもたちの紹介や、参加者である子どもたちから教育コーディネーターへのインタビューなどを行い「公園にあったらいいな」のアイデアを考え、グループ内で共有しました。

第3回ワークショップでは、次回以降のワークショップで考えるアイデアのベース作りを目的とし、参加した子どもたちが障害のある子どもたちと一緒に遊ぶためには何が必要かを知り、体験する回としました。構成は、ユニバーサルデザインに配慮された公園へ出かけ、実際に視覚障害体験や車いす体験をしました。そこで気づいたバリアや工夫に対して、さらなる改善点をグループ内で話し合い、意見を共有しました。

第4回ワークショップでは、参加した子どもたちとユニバーサルデザインに配慮された遊び場づくりのポイントを共有しました。これまでのワークショップで網羅できなかった多様なニーズも併せて紹介し、気づきの視点を補完しました。また、参加者の子どもたちの気づきから得られた工夫と工夫が反映された遊具について描かれたアイデアカードを計84枚作成しました。

▼図表1 ブランコのアイデアカード



<出典>品川区提供

第5回ワークショップでは、アイデアカードを基に子どもたち自身で公園計画案の模型を作成しました。限られた面積の公園に多くのアイデアをどのように取り入れるか、取り入れる遊具にはどのような工夫があるのかをグループ内で共有し、それぞれのおすすめポイントを紹介しました。

第6回ワークショップでは、これまでの集大成として、各グループが作成した公園模型の発表を保護者も招いて行いました。公園模型を子どもが実際に公園で遊んでいるような視点で小型カメラを通して見ることで、臨場感が生まれ、参加した子どもたちだけでなく、見学していた保護者からも驚きの声が上がりました。子どもたちは他のグループのアイデアを聞くことで、自分たちのグループから出なかった別の視点や気づきを得ました。

### ③アイデアの実現

J R大森駅近くの区立大井坂下公園は、施設の老朽化が進んでいることや遊具が安全基準に適合していないものがあり、改修の必要性が生じていました。また、公園面積がワークショップで作成した公園模型の規模と同等であったため、子どもたちのアイデアを活用したユニバーサルデザインに配慮した遊び場の第1号として再整備を行いました。例えば、車いすを使用する子どもと一緒に頂上まで登ることができる複合遊具や4人が同時に乗れる皿型のブランコなど、子どもたちのワークショップから出た31個のアイデアを取り入れました。

▼図表2 実際に整備された皿型ブランコ



<出典>筆者撮影

子どもたちのアイデアを実現する上で気を付けたことは、遊具の安全性を確保することと、ユニバーサルデザインの視点を取り入れることでした。例えば、砂場に車いすを使用する子どもが利用できるテーブルを設置しましたが、アイデアを実現するために、区が独自に設計・発注しました。電車を走らせるアイデアは、遊具としての整備は難しかったため、線路をモチーフにしたデザインを地面に描く工夫を行いました。

▼図表3 線路をイメージした地面



<出典>筆者撮影

#### ④ワークショップの場づくり

ワークショップで使用した資料については、イラストを多用し、わかりやすさを意識して作成しました。

参加した子どもたち同士の関係性の構築にあたっては、子どもたち同士の距離感に注意しました。子どもたち同士の距離感を近づけるために、床に座って自由な雰囲気をつくりました。

また、模型を作るときも普段使い慣れている文房具を用意するなど、子どもたちが緊張感を持たないように配慮しました。

障害のある子どもたちが参加する際には、普段と異なる環境に置かれるため、配慮すべきことを特別支援学校の先生とも調整しました。保護者の方にも参加いただいたため、家庭でのフォローもあり、障害のある子どもたちもワークショップの内容を理解して進めることができました。

ワークショップの構成にあたっては、公園の計画から施工に詳しく、子供向けワークショッ

プの経験が豊富なコンサルタントと協力することで、実際の設計や整備を見据えた上でワークショップを構成することができ、円滑に進めることができました。

職員もグループに入り、ワークショップを進行し、一緒に話しやすい雰囲気をつくりました。

#### ⑤広報

ワークショップの参加者募集の際には、区内公立小学校に募集チラシを配布しました。募集チラシは、子どもたちが主体となって公園をつくるという実施目的を、小学生の子どもたちがわかるような表現になるように努め、職員が作成しました。

ワークショップの様子を広報する「かわらばん」は、小学生にも読んでもらえるように、使用する漢字には配慮し、柔らかいイラストを使用しました。

完成おひろめ会の様子は区のメールマガジンやSNS等で大人から子どもまで広く周知しました。

▼図表4 かわらばん（一部抜粋）

子どもたちのアイデア等を活かした公園づくりワークショップ **かわらばん No.1**

令和元年10月27日(日)  
10:00～12:15@品川区役所

第1回「子どもたちのアイデア等を活かした公園づくりワークショップ」をかいさいしました。区内の小学生26名が参加し、遊びマップをつくり、ふだんの遊びをふり返りました。

### 1. 前回ワークショップのプログラム

9:30～受付	10:15～自こしようかい	10:55～遊びマップづくり	11:40～遊びマップの発表
受付ついでに名札をもらい、あだ名を書きます。みんな少しきんちょう気味です	自こしようかいでは、どんな遊びが好きか、みんなに伝えました。	ふだんの遊びのグループ分けについて、グループごとに話し合いました。	グループで話したことをみんなに発表しました。

### 2. みんなで自こしようかいをしました！

大きなさいころを使って、グループごとに自こしようかいをしました！始めはみんなきんちょうでしたが、だんだん楽しくなってきました。さいころが転がるたびに少しドキドキ・・・？

なぜか1がよく出るさいころ！

次はわたしのグループがあたりかな・・・？

### 3. 遊びマップをつくりました！

グループに分かれて、遊びマップをつくりました！みんなが好きな遊びを書き出し、「どんなところが好き？」「どんなところが楽しい？」などの理由を考え、遊びのなか間探しをしました。

<出典>品川区提供

## ⑥整備後の反響

完成おひろめ会の時に、「障害のある子どもが障害のないきょうだいと初めて一緒に遊べた」という声が印象的でした。また、ワークショップを通じて、参加した子どもたち同士のつながりや障害への理解が深まったと感じました。

また、他自治体からの視察を始め、大学やメディア取材など多くの反響もありました。

## ⑦今後の展望

今後もワークショップでのアイデアを参考にしつつ、インクルーシブ公園を整備していく予定です。

## (2) 第六期長期計画・調整計画市民ワークショップの取組について（武蔵野市）

### ①取組の背景と目的

市の総合計画にあたる第六期長期計画の策定（2020年度）以降に生じた社会情勢の変化に対応し、計画の実効性を保つため、2022年度から2カ年かけて、2024年度から2028年度までの5年間を計画期間とする第六期長期計画・調整計画（以下「調整計画」という。）を策定しています。策定にあたっては、第一期基本構想・長期計画策定以来の特徴である、市民参加・議員参加・職員参加を中心とした「武蔵野市方式」を継承し、圏域別意見交換会やパブリックコメント等様々な意見聴取の手法の一つとして、ワークショップを実施しました。

ワークショップは、2020年度以降、住民から見るとどのような変化があったかに着目することで、調整計画の策定委員会に住民がどのようなことを考えているか伝えることを目的としました。また、参加した住民は意見を出すだけでなく、自分事とすることで、新たな気づきを得ることや意識が変化することを目指しました。

### ②ワークショップの内容

ワークショップは2022年5月に2回と8月に1回実施しました。参加者はワークショップ毎に募集しました。5月はオンライン形式で実施し、参加者は18歳以上の市内在住の方を対象と

し、無作為抽出により案内通知を送付して募集しました。8月は対面形式で実施し、無作為抽出に加えて公募による参加者も募集しました。ワークショップの内容はどちらの形式も同じ構成で実施しました。参加者は延べ59名でした。

ワークショップの構成は、はじめに職員から全体説明として、計画策定の流れとワークショップの目的と趣旨を説明しました。

次にグループに分かれて、自己紹介と参加動機などを語り、交流を深めてから、各グループに配置された市民ファシリテーター<sup>4</sup>からワークショップの流れについて説明しました。

グループワークでは2020年4月以降に生じた様々な社会情勢の変化の下で、参加者が感じた変化を話し合いました。街の変化や参加者自身の変化、職場の変化、家族の変化などが挙がりました。その変化を「良い変化」、「どちらでもない変化」、「悪い変化」に分類しました。

次に変化の深掘りを行いました。「悪い変化を良いものにするには?」、「良い変化をより良いものにするには?」と参加者同士で考え、対話しました。各グループで出た意見を全体で共有しました。

その後、ワークショップに参加して得た気づきや感想をグループで話し合いました。

▼図表5 ワークショップの様子（オンライン形式）



<出典>武蔵野市提供

### ③市民ファシリテーターの活用

市では、住民同士の対話を円滑に進めるために、2018年に実施した第六期長期計画市民ワークショップから市民ファシリテーターと協力しています。市民ファシリテーターがワークシ

4 市内在住で、市の事業「コミュニティ未来塾むさしの」やオンラインワークショップ講座の修了生の方

ップ全体の進行や各グループでの対話の進行を担うことで、参加者と同じ住民目線に立って対話を促すことができ、話しやすい雰囲気づくりにつながっています。また、市民ファシリテーターからは「ワークショップを市民活動の実践の場として捉えている」、「市と市民の間に入ることで、純粋な市民の意見が得られると期待して協力している」との声があります。参加者からも話しやすい雰囲気が得られると好評を博しています。

#### ④取組の効果

参加者からは、「対話を通して気づきを得ることができた」、「市に対する意見だけでなく自分自身の行動変容につながった」、「市政への興味が高まった」との声がありました。

また、市民ファシリテーター同士のつながりも深まり、市内を中心とした市民活動を紹介するウェブサイトを作成するなど、ワークショップ後もその関係性を継続した活動が行われています。

さらに、オンライン形式で実施した際は、育児中の方や身体が不自由で外出しにくい高齢者の方が参加するなど、参加者の裾野が広がったと感じました。

ワークショップで聴取した意見を取りまとめた報告書は、調整計画の策定委員会に住民意見を取り入れるための重要なものとして受け止められました。

#### ⑤ワークショップの場づくり

ワークショップ実施前に市民ファシリテーターと相談しながらワークショップの構成を検討しました。例えば、市の計画や事業に関する情報提供の方法やワークショップ全体の流れなどについて、参加する住民がどう受け止めるかという視点に立った意見を取り入れることができました。市民ファシリテーターは日中に働いている方も多く、日程が合わない方については、個別に調整し、職員と市民ファシリテーターで意見を共有できるように努めました。

ワークショップ当日は参加者への謝礼を雰囲気づくりの一助として活用しました。謝礼をお

菓子の詰め合わせ（むさしのプレミアム<sup>5</sup>）としたことで、話のネタになるなど共通の話題として盛り上がりました。オンライン形式では、事前に送付することで、お菓子を食べたり、コーヒーやチャイを飲んだりしながら、参加できるようにしました。

▼図表6 むさしのプレミアム



<出典>武蔵野市提供

対面形式の際は音楽を流すことや、参加者を笑顔で迎えるなど、良い雰囲気をつくるように努めました。

オンラインワークショップの運営では、オンライン特有の準備が必要となりました。例えば、参加者によって、スマホやタブレット、パソコンと異なるため、それぞれのマニュアルを用意し、事前に接続確認を行いました。また、当日接続できない参加者には電話でフォローを行いました。

オンラインと対面のどちらの形式とも、職員が書記を務め、参加者が意見交換に集中できるように市民ファシリテーターと協力しました。

ワークショップの構成にあたっては、ワークショップの経験が豊富な事業者と協力することで、オンラインでの開催に必要な知見を得ることができました。

#### ⑥広報

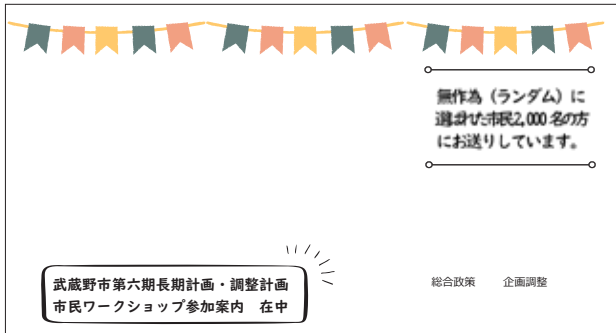
無作為抽出した住民に向けては、中身に興味を持ってもらえるように、封筒をデコレーションする工夫をしました。また、同封したチラシ

5 武蔵野市を代表する魅力的な品々をおみやげとして広く内外にPRし、当市発の地域ブランドの確立と地域活性化を推進するため、その目的に相応しい商品

は、文字を少なくしたり、以前に参加された方の声を入れるなどして、工夫しました。

公募については、市報やSNS、ラジオを通じて幅広く周知しました。

▼図表7 デコレーションした封筒



<出典>武蔵野市提供

▼図表8 案内チラシ

武蔵野市 第六期長期計画・調整計画 市民ワークショップのお知らせ

# 聞いて語って 未来をつくる

**3/5 3/12**  
対面 3歳以上 3歳未満は3分  
オンライン

各日 13:00~17:00

このお知らせは令和4年12月1日時点で、市内に住居登録のある18歳以上の方から2,000名を無作為に選び、お送りしています。  
※参加できる方はこのお知らせの宛先のご本人様のみです。  
※家族の方などが代理で参加することはできません。

詳細・申込方法は裏面へ

参加特典  
むさしのプレミアム詰め合わせ  
※写真は一例です。

<出典>武蔵野市提供

## ⑦今後の展望

新型コロナウイルス感染症の流行をきっかけに、オンラインを活用した市民参加手法を得ることができました。オンラインによる参加という選択肢が増えたことで、より広く市民参加の機会を提供できるようになったと考えます。今

後は、対面形式のワークショップとオンライン形式でのワークショップ双方のメリットを生かしつつ、中高生など若い世代が参加しやすい仕組みを検討するなど、さらなる工夫を進めていきたいと考えています。

## 3. まとめ

品川区の事例では、参加者である子どもに寄り添った資料作成や説明だけでなく視覚障害体験などを行うとともに、普段使い慣れている文房具を用意し、緊張しない工夫などを行いました。また、武蔵野市の事例では、市民ファシリテーターがワークショップの構成を作る段階から参加したり、ワークショップでは参加者と同じ住民目線に立って進行することで意見を出しやすくしたりするなどの工夫を行っていました。

参加する住民は自らの時間を使って、ワークショップに参加しています。しかし、十分な準備を行うことができないと、住民の意見聴取という本来の目的をうまく果たせず、形式的なワークショップとなり、自治体も住民も消化不良となってしまいます。一方、今回紹介した事例は、自治体の施策や考えを追認してもらうものでなく、自治体の住民の意見を素直に聞き取りたいという姿勢から取り組んでいることが感じられました。その結果として、意見の聴取だけでなく、参加者に新たな気づきやつながりが創出されることも分かりました。

本稿が各自治体においてワークショップを効果的に実施する上での一助となれば幸いです。